



カクマ難民キャンプ 図書館建設と書籍の贈呈

現在ある図書館 壊れかけた外壁
今年の夏にここに新しい第2図書館を再建します



私を含め10人ほどの国連・NGOスタッフを乗せたセズナが、まもなくカクマの地に着陸しようとしていた。「ああ、ほんとにまた来ちゃったんだ。」私はなぜか緊張していた。3年ぶり二度目となる今回のカクマ難民キャンプ訪問。96年、大学生生活最後の夏休みに初めてここを訪れたあの時、1ヶ月間の滞在を終えてカクマを離れる自分の中には無力感でいっぱいだった。難民問題の根があまりに深いことを知り、なんの専門知識や技術を持たない自分に一体何ができるのだろうか。そう感じていたの覚えている。にも関わらず、あのころから大に進歩もしていないのに、再びのこのころ来てしまった。

今回のカクマ訪問の目的は大別すると二つ。第一は図書館の書籍や文具の購入である。私より一月近く先に来ていたわが校の学生ボランティアの4人が、図書館の拡張工事や本棚などの家具作りの仕事に助んでいた。本棚に並んでいた書籍は、全て外国からの寄付本だった。しかし送られてきた本のほとんどが、この難民キャンプでの適合性を無視して一方的に寄付され、キャンプでは使われていない言語だったり、価値が古い本や宗教本だったりと、司書室には図書館に並べられない本が何千冊も山積みされていた。それとも図書館は、勉強熱心な難民のひとたちで毎日満席である。



教育部門や図書館担当のスタッフらと話し合いを重ね、わが校の寄付金の半分を拡張工事に、残り半分を図書館に運んだ書籍や文具の購入、司書をはじめ図書館で働く人達(全員難民)6人分の年間人件費(一人当たり約2000~3000円/月)に充てることになった。図書館運営には、途上国で

の図書館運営の専門家で、ここカクマでも図書館や教育関係の担当してきたというイギリス人ポール・ミッチェル氏の助けを借りた。中学生レベルの参考書や小説など一般的な図書、あとは女性や子供にも関する書籍や図鑑、絵本、スポーツの本なども選び、合計544冊を購入した。

そして、キャンプ訪問の第二の目的であった、カクマ難民の詩集「傾いた島かご」の出版報告。

3年前にキャンプを訪れた際、あるきっかけで出会った1冊の本。キャンプで避難生活を送る難民たちの詩や物語をまとめたその本を日本語翻訳し、仲間と自費出版した。今回のカクマ再訪を決意したのも、この詩集に絵を提供してくれた絵画教室のスーダン人たちに出版報告をしたというのが最大の理由だった。念願だった

絵画教室の元生徒たちと再会を果たし、一人一人に本を渡し、本の収益金は図書館の図書購入費に充てることを伝えると、皆大変喜んでくれた。まずは彼らが無事でいてくれたことがうれしかった。あの頃は少年だと思っていた彼らも、心身とも成長して今では立派な青年といった感じ。元気な姿を見てはほっとしたが、それは同時にこの3年間の変化もなく、祖国に平和が戻っていないことを意味する。自分とほぼ同年代の彼らが、将来への希望を抱くこともできず、いつまで続くとも分からない先の見えない生活を強いられるのを残そうと、なんとも言えず切なくなる。私は、3年前にぶち当たった壁に再び直面している。(中島佳穂)



難民製作の彫刻

まんまるな目にかこまれながら

孫田 佐世

幸せて何だろう。これから、どんな人生を作っていくのか。人のために役に立ちたいけどどうしたらいいんだろう。そんなこと日本では口に出すことも恥ずかしくなってしまう。・・・私はこの春、これからの人生を大きく変えるかもしれない体験をしました。

■カンボジアでの日々

ワークキャンプでは、カンボジアの村に滞在し、現地のNGOの人たちや村ごとともに小学校の建設を行っていました。地雷が埋まっているような荒野の中の新な道を手探りで進んでいくとき、時にはランドクルーザーが動かなくなってしまうのを引っ張りあげたりして村にたどり着きます。そして、バナナの葉で屋根をふいた米倉のなかで、マラリアの蚊よけのための蚊帳をつけてその中で寝ます。電気も水道もない。トイレも穴を掘って、人のいないところ。お風呂もなく、村の人と一緒に近くの川で行水、木の枝を農作業を終えた牛がジャブジャブと川を渡っていく・・・

村の人々にとって、日本ってどこ? 何で日本人そんな色に白いのか? この謎は?・・・日本人、いや全てのカンボジア以外のものはなんでも大変珍しく、どこにいても真ん丸な目に囲まれました。

昼間は村の人と小学校の建設です。この建設は、わが校のプロジェクトが資金を提供し、村の人たちが行うものでもでした。そして、私達は村の人と一緒に木を切ったり、釘を打ったり土を運んだりしたのです。私たちの建設作業は普段から土木作

業に慣れていないカンボジアの人々にははるかに及びません。労働力としては微々たる役割しか果たせなかったといえるでしょう。しかし、「わざわざ日本からこうしてやってきて一生懸命学校を作っている、学校っていうものはそんなに大切なものなんだ!」「みんなで協力して学校を作らなくっちゃ!」と村の人に教育の大切さを知らせるのに大きな役割をもったといえます。村の人の学校建設の意欲は大変高く、村を上げて、急ピッチで建設作業は進められていきました。本当に、急ピッチで作業は進められました。たった二週間の私たちの滞在の間にはなんとゼロの状態から、村の小学校はほぼ完成してしまったのです!

夜は村の人たちが毎晩のように歓迎のお祭りを開いてくれました。お祭りともいって、トラックのスピーカーを大音量にしてそれに合わせて踊りつづけるだけなのですが、みんな私達をもてなすのにわいわいがやがや。私たちが小学校でやったようなハンカチ落としなんかのゲームも疲れ果てるまでやり(やらされ)ました。私たちはクマールのダンスを2週間みっちり叩き込まれ、今では日本人でも有数のクマールダンサーになったと自負しています。日本の文化も折り紙を持っていったり浴衣を着たりして紹介しました。もっていったサッカーボールに子供達は夢中になり、けんだまに一生懸命になっていました。行く先々が私達は「コーラス陸となり『もみじ』『ふるさど』を合唱しました。

昨年のワークキャンプの学校が完成していました



カンボット報告 胡椒は、農民の汗の結晶!

2月23日(水)午前6時過ぎに、お茶一杯を飲んだだけでクレイトム村を出発。11時過ぎに、カンボットのUCC Development Foundationというアメリカの個人が主に支援するNGOの事務所に着きました。代表のLinda McKinneyさんと打ち合わせのち、プロジェクトを実施しているChamkr Bei Village村に向かう。アメリカ国籍のカンボジア人スタッフのBK Sanの案内で、まず、胡椒を栽培している農家を訪問しました。そこに10人ほどの人たちが集まり、胡椒栽培の仕方、仲買との関係などについて質問し、今後の胡椒栽培農家の組合づくりについても話し合いました。

それから胡椒栽培している畑と水を供給するための池を2ヶ所(1960年代、シアヌーク時代に掘ったとのこと)を見てもらいました。水運びが、想像以上に苦痛な重労働であることを知りました。

◎胡椒栽培の状況:

3、4メートルある支柱の木に2本の苗をからますように育てる。3年もすると立派な苗に育って実を結ぶ。収穫は、3月から5月で、収穫後、そのままに用意していた堆肥をほどこす。牛や鶏の糞と植物を混ぜ合わせてつくった有機肥料で、農薬など一切使用していない。

◎水やり

乾季の期間は、根がまだしっかりついていない移植1年の苗に対しては3日にバケツ1杯の水が必要である。2年以上の苗には5日にバケツ1杯。

ショウワ生産組合をつくって日本への輸出の準備をすすめています

